The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『西遊記』の叙述法について
Author(s)	冨永, 鉄平
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2004, 38, p. 33-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47954
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『西遊記』の叙述法について

冨永鉄平

一　『西遊記』は退屈な小説か？

種明かしされた推理小説ほど退屈なものはないだろう。誰が犯人でどのようなトリックを用いて犯罪が実行されたのか、それらは、推理小説では普通読者には伏せられている。その謎に登場人物たちと共に向かい合い、騙され、推理していくからこそ、読者は物語の中に引き込まれ、驚嘆し、夢中になる。『西遊記』は勿論推理小説ではない。作者が読者をトリックにかけ、そのトリックによって物語に引き込んでいく典型が推理小説だとすれば、『西遊記』は、その推理小説的叙述法からほど遠い小説といえる。

例えば、第六十回、火焔山の一段を見てみよう。火焔山の火を消すため、悟空は牛魔王の妻羅刹女のもとへと芭蕉扇を借りに行く。だが、羅刹女は、悟空が息子の紅孩児ともめたことを根にもち、頑として芭蕉扇を貸そうとしない。そこで悟空は脅迫まがいに芭蕉扇を奪い取るが、これは偽物。騙された悟空は仕方なく牛魔王のもとへ頼みに行く。牛魔王もやはり頼みを聞き入れず戦いが始まる。その最中になんと牛魔王は宴会へと出かけてしまう。そ

こで悟空は、牛魔王に化け羅刹女から芭蕉扇を騙し取ることを思いつく。

心中暗想道、「這牛王在此貪杯、那裏等得他散。就是散了、也不肯借扇与我。不如偸了他的金睛獣、変做（麼）〔魔〕王、去哄那羅刹女、騙他扇子、送我師父過山為妙」（以下、テキストは『世徳堂本』を用いた。原テキストにある誤字は（　）で示し、校訂字・脱字を〔　〕で示した）

（心中ひそかに想います、「牛魔王の奴はここで酒浸り、ならばどうして奴がお開きにするのを待つ必要があろうか。たとえお開きになったとしても、扇をわしに貸してはくれまい。ならば奴の金睛獣を盗んで、わしが魔王になりすまし、羅刹女を騙して扇を手に入れ、師匠を山越えさせるに限る」）

かくして、悟空は牛魔王になりすまして羅刹女のもとへと出かけ、彼女をまんまと騙して芭蕉扇を手に入れるのだが、悟空は羅刹女を騙しこそすれ、決して読者を騙したりはしないのである。悟空の「はかりごと」は、心の声という形であらかじめ読者に明かされ、あとは、その「はかりごと」が時間軸に沿って実行されていくだけなのである。

これを、『水滸伝』の中でも有名な、第十六回「楊志押送金銀担　呉用智取生辰綱」の叙述と比較してみよう。

晁蓋道、「呉先生、我等還是軟取、却是硬取」呉用笑道、「我已安排定了圈套。只看他来的光景。力則力取、智則智取。我有一条計策、不知中你們意否。如此如此」晁蓋聴了大喜、攙着脚道、「好妙計。不枉了称你做智多星。果然賽過諸葛亮。好計策」呉用道、「休得再提。常言道、『隔墻須有耳、窓外豈無人』只可你知我知」

（晁蓋が申します、「呉先生、我等は知恵でとりますか、それとも腕力でとりますか」呉用は笑って申します、「すでにはかりごとは用意できてあります。あとは彼らの出方を見ることといたしましょう。腕力でくるようならこちらも腕力で、知恵でくるようならこちらも知恵で。その計略ですが、あなた方のお気に召すかどうか。かくかくしかじか」晁蓋は聞いて大いに喜び、足をばたばたさせて申します、「妙計かな。さすがは智多星と呼ばれるだけのことはある。諸葛亮以上だ。まさに妙計だ」呉用は申します、「もうよしましょう。よく言うでしょう、『壁に耳あり、障子に目あり』と。我等のみぞ知るってことで」）

晁蓋・呉用・公孫勝・劉唐・阮小二・阮小五・阮小七の七人がそろい、これからいよいよ生辰綱を奪い取る相談をしようという場面。すでに「はかりごと」は立ててあると呉用は言うものの、肝心の「はかりごと」は「かくかくしかじか」としか表現されない。

『水滸伝』のこの場面は、読者をも騙そうという筆づかいで物語が展開され、結末を予測することができない不安感によって読者を物語の中に引き込んでいく。意外性を重視した叙述方法によって、呉用の「はかりごと」の見事さや彼らの手並みの鮮やかさが見事に引き立てられていくのである。

『西遊記』第六十回に於いても、作者がもしストーリーテラーに徹するならば、悟空の「はかりごと」を謎とし、牛魔王に化けたことも明かさず芭蕉扇を騙し取った後に、悟空が本性を明かして種明かしをしたことであろう。その方が、「はかりごと」の見事さや、手並みの鮮やかさを引き立たせ、必ずや読者を驚嘆させたに違いない。『水滸伝』の叙述に比べると、『西遊記』のそれは明らかに退屈なのである。だが、『西遊記』の作者はあえて、時間軸に

沿って展開する退屈な叙述法を選択したといえる。そしてそのことによって『水滸伝』とは異なった別の面白さを獲得したのである。

二　第六十回、火焔山の一段

第六十回をさらに詳しく見ていこう。

悟空と羅刹女は偽の夫婦を演じる。羅刹女から芭蕉扇を騙し取るという目的達成のためには、羅刹女を信用させ機嫌をとるのが一番である。悟空は「ほんものに代わって」羅刹女に「無沙汰を詫び」、羅刹女の方も、久しぶりの牛魔王の来訪に何とか気を引こうとする。この悟空と羅刹女の心理的なかけひきの描写は実に見事である。

二人の会話は牛魔王（悟空）の「久しぶりじゃ」という挨拶によって始まる。悟空は勿論、この直前に偽の芭蕉扇を奪い取る際に会っているので、「久しぶり」ではない。本物の牛魔王が新しい妻の玉面公主のもとへ入りびたっているから、悟空はもっともらしくそう述べたのである。羅刹女の方も、夫の急の帰還に少し戸惑いながら、「大王寵幸新婚、抛撇奴家。今日是那陣風児吹你来的（大王様は新妻ばかりを可愛がって、あたしのことなんてほったらかし。今日はどんな風の吹き回しでいらしたの）」と探りを入れる。

又道、「近聞悟空那厮保唐僧、将近火焔山界。恐他来問你借扇子。我恨那厮害子之仇未報。但来時、可差人報我。等我拿他、分屍万段、以雪我夫妻之恨」羅刹聞言、滴涙告道、「大王、常言説、『男児無婦財無主、女子無夫身無主』我的性命、険些児不着這猢猻害了」大聖〔聴〕得、故（子）〔意〕発怒罵道、「那潑猴幾時過去了」羅刹

道、「還未去。昨日到我這裏借扇子……是我叫他幾声叔叔、将扇与他去也」大聖又假意搥胸道、「可惜、可惜。夫人錯了。怎麼就把這宝貝与那猢猻。惱殺我也」羅刹笑道、「大王、息怒。与他的是假扇。但哄他去了」

（又申します、「近頃悟空の奴が唐僧を守り、火焔山のあたりまで来ているそうだ。奴がお前に扇を借りに来るやも知れんぞ。我が子をいじめた恨みは未だ晴らせておらぬ。もしやってきた時は、人をよこしてわしに知らせてくれ。奴を捕まえ、こまぎれにして、われら夫婦の恨みをはらそうではないか」羅刹女はそれを聞き、涙ながらに牛魔王に訴えます、「大王様、諺にも、『男に妻がなければ財産は管理できない、女に夫がなければ取り仕切ってくれるものがいない』というでしょう。すんでのところで、あのエテ公に命をとられてしまうところでした」大聖はそれを聞いて、わざと怒ったふりをして申します、「あのワルザルの奴はいつ火焔山を越しやがったんだ」羅刹女は申します、「まだ越してはいません。昨日わたしのところまで芭蕉扇を借りに来て……わたしの方が「叔叔」と呼んで機嫌をとって、扇をもたせて行かしてやりました」大聖はまた怒ったふりをして胸をたたいて申します、「残念、残念。奥や、しくじったな。どうしてあの宝物をあのエテ公なんかにもたせたんだ。ああ腹の虫がおさまらぬ」羅刹女は笑って申します、「大王様、お怒りにならないで。奴にもたせたのは偽の扇。騙しただけのこと」）

地の文が牛魔王を「大聖」と記述するのは、その牛魔王が「にせもの」であることを強調するためのものであること、言うまでもない。その「大聖」は、悟空（それは「大聖」自らでもある）のことを「潑猴」「猢猻」と故意に悪し様に呼び、悟空への怨恨を述べる。さらに、自分と羅刹女を「我夫妻（われら夫婦）」と呼び、夫婦であることを

強調して、羅刹女の機嫌をとることも忘れない。それに対し羅刹女も、悟空に芭蕉扇を奪われた顚末をなかなか効果的な方法で話していく。まず、しおらしく涙を見せ、「男に妻がなければ財産は管理できない、女に夫がなければ取り仕切ってくれるものがいない」という諺を用いて、悟空にひどい目にあわされたのは妻として保護してくれる牛魔王が不在であったためだと言う。また、芭蕉扇を奪われるまでの過程は詳細に説明するが、それが偽物であったことには触れない。相手を心配させておいて、それが偽物であったことを明かすのである。彼女がとったこの話し方は、前述の『水滸伝』生辰綱での叙述法に似ているかもしれない。種明かしを最後にすることで、自身の手柄をアピールしているのである。ただ、残念なことに、話した相手は偽の牛魔王、つまり悟空であった。悟空はうまく話をあわせ、わざとらしく怒ったふりをする。騙された悟空が騙した羅刹女を騙し、騙した羅刹女が偽の夫と心をかよわせる。ここでは、「夫婦の会話」が実にユーモラスに展開される。

羅刹女はさらに、いじらしくも色っぽく牛魔王に迫る。

遂擎杯奉上道、「大王、燕爾新婚。千万莫忘結髪。且喫一杯鄉中之水」大聖不（収）〔敢〕不接、只得笑吟吟、挙觴在手道、「夫人、先飲。我因図治外産、久別夫人。早晩蒙護守家（闌）〔門〕、権為酬謝」羅刹復接杯斟起、遞与大王道、「自古道、『妻者斉也』夫乃養身之父、講甚麼謝」両人謙謙講講、方才坐下巡酒。……酒至数巡、羅刹（覓）〔覚〕有半酣。色情微動、就和孫大聖挨挨擦擦、搭搭拈拈。携着手、俏語温存。並着肩、低声俯就。将一杯酒、你喝一口、我喝一口、却又哺果。……羅刹見他看着宝貝沈思、忍不住上前、将粉面揾在行者臉上、叫道、「親親、你収了宝貝喫酒罷。只管出神想甚麼哩」

（そこで杯をささげもって申します、「大王様、新婚おめでとうございます。でも正妻であるわたしのこともお忘れにならないでくださいまし。さあ郷のお水を一杯どうぞ」大聖も受けないわけにはいかず、ただにこにこしながら、杯を手に申します、「奥や、お前から飲みなさい。外の財産を管理するのにかまけて、お前には随分ご無沙汰してしまった。朝晩この家のきりもりをまかせっきりにしてしまったのだから、わしの感謝の気持ちと思ってくれ」羅刹女はその杯を受けるとまた酒をつぎ、大王に差し出して申します、「昔から申します、『妻はわが身にひとしい』と。夫は養ってくれる父と同じですもの、お礼なんて」二人はしきりにお互いをもちあげながら、ようやく席につき酒をまわします。……酒が数巡すると、羅刹女はほろ酔いかげんとなりました。その気になり、悟空に寄り添っていちゃつきます。手をとって、優しくささやきます。肩を並べ、小声で甘えます。一つの杯を、一口ずつ飲み交わし、果ては果物を口移し。……羅刹女は夫が宝を見ながら考え込んでしまったのを見て、たまらずにじり寄り、化粧した顔を行者の顔に押し付け、そこで申します、「愛しのあなた、宝物なんてしまって一杯やりましょう。何をぼんやり考えていらっしゃるの」）

羅刹女は、内心では夫の新妻玉面公主に激しい嫉妬心をもやしながらも、女のプライドをかなぐり捨てて、お祝いを述べ、「本妻のわたしを忘れないで」と述べる。夫が「外産にかまけて」と「久闊」を詫びると、「妻はわが身にひとしい」とさらにいじらしくまた酒を譲る。酔いがまわり始めると、やがて彼女は、夫ににじりよる。口移しで果物を食べさせ、さらには、牛魔王を「親親（愛する人・可愛い人の意）」とまで呼ぶのである。ここには、夫の愛を取り戻したいと願う一人の哀れな妻の姿があるだろう。だが、相手は「にせもの」の悟空。悟空は、「まんざらで

もない夫」を見事に演じながらも、所詮は「酒も女もからきし」の猿まね。読者を、「ほんもの」とも「にせもの」ともつかぬ不思議な世界に引き込み、独特のユーモアを展開するのである。

さて、本物の芭蕉扇を取り出させ、使い方を聞き出すことにも成功した悟空は、いよいよ正体を羅刹女に明かし、芭蕉扇を奪って三蔵のもとへと向かう。悟空が去ってすぐ、本物の牛魔王が羅刹女のもとへと戻ってくる。偽の牛魔王に対していじらしい姿を見せていた羅刹女であるが、悟空に騙された怒りと恥ずかしさから、本物の牛魔王には八つ当たりしてしまう。偽の牛魔王に対しては「大王」とか「親親」と呼んでいた羅刹女が、「ほんもの」に対しては「潑老天殺的（うだつのあがらない死にぞこないの老いぼれめ）」と怒鳴りつけ、その剣幕に牛魔王もたじたじとなってしまう。

牛王道、「夫人、保重、勿得心焦。等我赶上猢猻、奪了宝貝、剝了他皮、剉碎他骨、擺出他的心肝、与你出気」叫、「拿兵器来」女童道、「爺爺的兵器不在這裏」牛王道、「拿你奶奶的兵器来罷」

（牛魔王は申します、「奥や、落ち着いて、いらいらするんじゃない。わしがあのエテ公を追いかけて、宝物を奪い返し、奴の皮をはいで、骨を砕き、心肝を抉り出して、おまえの鬱憤を晴らさせてくれよう」そこで叫びます、「武器をもて」女童は申します、「旦那様の武器はここにはありません」牛魔王は申します、「奥様の武器をもってこい」）

本物の牛魔王も腹を立てたのか、羅刹女の機嫌をとるためか、悟空をやっつけてやると息巻いて、「拿兵器来（武器をもて）」と女童に命じる。しかし、玉面公主のもとへと入りびたっていたため、武器も全てそちらに置いているの

であろう、「爺爺的兵器不在這裏（旦那様の武器はここにはありません）」と女童に言われて墓穴を掘る。仕方なく「拿你奶奶的兵器来罷（奥様の武器をもってこい）」と命じるのだが、「奶奶（女のご主人様）」という呼び方への変化からも牛魔王のばつの悪さが窺え、読者の失笑を誘う。

この一段で注目すべきは、「真假（ほんものとにせもの）」というテーマをめぐる巧みな展開である。「にせもの」と「ほんもの」とを対照することによって「滑稽」の世界へ引き込むことは古くから見られる技法である。その伝統を踏襲しつつ、ここでは「にせもの」が羅刹女と仲睦まじい夫婦を演じれば、「ほんもの」が冷め切った夫婦の姿を見せるのである。ここに「ほんもの」と「にせもの」の価値の転倒が起こっていることはいうまでもない。しかも、作者の意図はさらに深い。一面で「にせもの」の夫婦が見せた仲睦まじい関係はいかにも「夫婦」らしいが、羅刹女と本物の牛魔王の冷め切った関係こそが真の「夫婦」でもある。作者が悟空と羅刹女のやりとりを必要以上に詳細に描き出したのも、「にせもの」というテーマをめぐってこの二つの「夫婦」の姿を対照的に、且つユーモラスに描き出すためだったのである。

三　第八十二回、地湧夫人の一段

『西遊記』の中でもその時間軸に沿った叙述方法が生かされた別の場面をもう一例見てみよう。第八十二回、地湧夫人の一段である。

地湧夫人は三蔵を洞内に閉じ込め、無理やり夫婦になろうと迫る。虫に化けて忍び込んだ悟空は、隙を見て三蔵に逃げる算段をもちかける。その算段は女怪が三蔵に酒をついだらすぐさま酒をつぎかえして酒の泡をたて、虫に

化けた悟空がその下にもぐりこんで女怪の腹に入り、退治するというもの。三蔵はなんとか悟空の言う通りにするが、つがれた酒を女怪がすぐに飲まなかったために泡は無くなり、虫に化けた悟空はすくいあげられてはじきとばされてしまう。次に悟空は、花園に行って悟空が化けた桃を女怪に食べさせるという算段を三蔵にもちかける。今度はうまく事が進み、悟空は女怪の腹中に入り込む。驚いた女怪は悟空の脅迫に従って三蔵を洞の外まで連れて行き、そこでようやく腹の外へと出てきた悟空と戦いを始める。しかし、敵わぬと見た女怪は悟空たちの隙をついて再び三蔵をさらい、洞内へと消えてしまう。以上が第八十二回の主な展開だが、ここでも、悟空の「はかりごと」は三蔵への説明という形をとってあらかじめ読者に示されている。三蔵と悟空はその「はかりごと」の成功に向かって時間軸に沿って行動していくことになる。

この一段は、地湧夫人の目的が三蔵との結婚にあることからもわかるように、性的な隠喩に満ちており、そのことは中野美代子氏にすでに考証がある（『西遊記』（岩波書店）二〇〇〇年）。中野氏は、一度目の「はかりごと」で悟空がもぐりこむ「喜花児」が精液の意味をもつこと、二度目の「はかりごと」で悟空が化けた「桃」が女体のシンボルであることを指摘し、腹中に入る行為が性交を連想させるものであると述べている。また、三蔵が女怪と共にやってくる花園の素晴らしさを詠んだ詞についても、そこに列挙されている建物や池や花の名に女怪の欲望が託されているとし、その最後の一句「園中只少玉瓊花（園中に欠くるはただ玉瓊の花のみ）」の「玉瓊花」が「玉茎」を指すことは明らかで、この詞全体の過剰な羅列も全てここに収斂されていると指摘している。さらに、「洞といい、壺といい、入り口がせまく内部がふくらんでいる閉じ込められた空間は、あらゆる民族において子宮つまり母胎のシンボリズムを負うている（『西遊記の秘密』（福武書店）一九八四年）」と中野氏が述べている通り、女怪が住むこ

の洞窟の深くいりくんだ様も、体内、特に子宮を暗示しているといえるかもしれない。このように、『西遊記』第八十二回は性的な隠喩に満ち、そのことがこの物語に一種の奥行きを与えているのである。

だが、この一段で最も注目すべきことは、物語の中に性的隠喩がひそませてあることではない。性的隠喩が叙述法を決定し、物語そのものまでも規定している点である。そもそも第八十二回は、三蔵も次のように述べるごとく、現在あるような曲折を経て女怪を退治しなくとも、悟空と女怪が初めから戦えばすぐに片付いてしまう事件である。悟空が女怪の腹中に潜入することは、ある言い方をすれば、物語としては大きな寄り道にすぎない。

三蔵道、「你若有手段、就与他賭闘便了。只要鑽在他肚裏怎麼」行者道、「師父、你不知趣。他這個洞、若好出入、便可与他賭闘。只為出入不便、曲道難行。若就動手、他這一窩子、老老小小、連我都扯住、却怎麼了」

（三蔵は申します、「おまえにもし手立てがあるのなら、奴と戦えばよかろうに。腹に入り込むことばかり考えてどうしようというのだ」行者は申します、「師匠、あんたって人はものを知らないなぁ。この洞がもし、出入りしやすけりゃ、わたしだって戦いますよ。ただ出入りに不便な上に、道は曲がりくねって動きづらい。もし手を出して、一家総出、年寄りから子供までが俺をつかまえてしまったら、どうなるっていうんですか」）

三蔵の至極もっともな疑問に対する悟空の答え、「你不知趣」という言葉の中に、『西遊記』の秘密が実はある。悟空はこの瞬間、物語の枠組みを踏み越えて、作者と同じ視点から物語をながめている。取経という目的に向かってまっすぐに進むことだけが旅の楽しみではない。先へ先へとストーリーを進めていくことだけが物語のおもしろさではないのだ。ここでの悟空の目的は三蔵を助けることではない。女怪の腹中に入ることなのである。

行者道、「没事。没事。那妖精整治酒与你喫、没奈何、也喫他一鍾。只要斟得急些児、斟起一个喜花児来。等我変作個蟭蟟虫児、飛在酒泡之下、他把我一口呑下肚去、我就捻破他的心肝、扯断他的肺腑、弄死那妖精、你才得脱身出去」

（行者は申します、「なんてことはない。あの女怪めが酒の準備を整えてあなたに飲ませようとしたら、その時はどうしようもない、一杯だけ飲んでください。ただその時急いでつぎ返しさえすれば、「酒の泡」がたちます。そうしたらわたしが羽虫に化けて、酒の泡の下まで飛んでいき、奴がわたしごと飲み込んで腹の中にたどり着いたら、奴の心肝をねじ切り、肺腑をひきちぎって、あの女怪を殺してやったら、あんたもようやく脱出できるってもんだ」）

「喜花児」という語、「喜」は酒を連想させ、文脈から見て「酒の泡」といった意だと思われるが、中野氏も述べている通り、時に精液の隠喩としても用いられ、悟空がそれとともに彼女の腹中に入るというのだから、即ち性交が暗示されていることはいうまでもない。地湧夫人のそもそもの狙いは三蔵と契りを結び妊娠、出産して子供をつくる点にある。したがって、ここでの悟空の表現もその縁語が故意に選択されることになる。たとえば「心肝」とは、第八十一回で小坊主に化けて退治に来た悟空に地湧夫人が「心肝哥哥（愛しいおにいさん）」と呼びかけているように、「愛しい人（三蔵）」の意で、「肺腑」も同様の語であろう。悟空のここでの表現は、つまり「奴の胸のうちから愛しい人（三蔵）を引っぺがし、胸の想いを断ち切らせて、女怪めを弄んでやったら、あんたもようやく彼女の想いから自由になれる」というのとかけてある。地湧夫人の三蔵への執着を茶化していることは明白であろう。

また、二回目の「はかりごと」によって悟空はようやく女怪の腹中に入ることができるのだが、腹中に入るという悟空のこの行為は妊娠を茶化したものといえる。そのことは、この部分の李卓吾評が、「這妖精未曾成親肚内已先有個小和尚了（この女怪はまだ結婚すらしてないのに腹に小和尚ができた）」と述べている点に明らかである。地湧夫人の欲望は、悟空を腹中に招き入れるといういわば「仮想妊娠」によって皮肉な現実をみるのである。

そしてその結果、腹中でひとしきり悟空に暴れられ、彼女はたまらず小妖たちを呼びだす。

忽聴得叫、却才都跑将来。又見妖精倒在地上、面容改色、口裏哼哼的爬不動。連忙攙起、囲在一処道、「夫人、怎的不好。想是急心痛了」妖精道、「不是。不是。你莫要問。我肚裏已有了人也。快把這和尚送出去、留我性命」

（突然女怪の叫び声をきいたものですから、ようやくみなが駆けつけてきました。見れば女怪が地面にぶっ倒れ、顔面蒼白、うんうんとうめき声をあげながら這い動くことさえ出来ない有様。小妖たちは慌ててたすけ起こし、取り囲んで申します、「奥様、どうなさったのですか。しゃくの発作でもおきたみたいですが」女怪は申します、「違う。違う。いらぬことを聞くでない。わたしの腹の中にはもうできてしまっているんだよ。はやくこの和尚を追い出しちまって、わたしの命を助けておくれ」）

ここにいう「有了人」は、いうまでもなく「人がいる」と「できてしまった」とがかけてある。だからこそ李卓吾評も、「這様薄情的、有了人便打発和尚去矣（この薄情者、子供ができたらすぐに和尚を追い出すとは）」と述べる。「子供ができたからにはこの和尚はもう用済み、追い出してしまえ」ではあまりに薄情だ、というのである。悟空は、女怪の腹中から「心肝（愛しい人）」をひっぺがし、一度腹中に入って出てくることによって妊娠と出産を経験

させたといえよう。悟空の目的はこの点にあるのであって、三蔵を救出する点にはない。つまりこれが悟空の知る「有趣」であり、三蔵の知らない「おもしろみ」なのである。『西遊記』第八十二回は、「性的隠喩」に中心的なテーマがあり、ストーリーも叙述法も一語一語の選択も、すべてはこのテーマをめぐって展開されているといえよう。

四　おわりに

『西遊記』の作者は意外性を重視した叙述法を選択しなかった。彼が選択したのは時間軸に沿って坦々と展開する退屈なものだった。だが、そこには、「ネタ」がすべて割れているからこそもりこめる「見立て」とユーモアの世界があった。第六十回の「にせもの」というテーマをめぐって展開された「夫婦の人情」、第八十二回の「性的隠喩」をめぐって展開された悟空が言うところの「趣」、それらは、いわば、退屈なストーリーに仕組まれた「滑稽」であった。作者はその「滑稽」のゆえにあえてこの叙述法を選択したのである。

（大学院後期課程学生）

論 文 概 要

関於『西遊記』的叙述法

冨永　鉄平

在『西遊記』中，孫悟空或妖怪等「謀略」的場面很多。作者把那些「謀略」的全貌預先向読者解釈。然後把「謀略」成功過程中的各自的行動和思考按時間来叙述。因為這種叙述方式讓読者猜得到故事是怎様展開的，所以読者不能与登場人物一起被欺騙、進行推理，也就没有了対揭穿秘密的驚嘆和感動，也就没有趣了。雖然『西遊記』的作者不採用重視意外性的叙述方式，而採用了沒有趣味的叙述方式，可是『西遊記』却別有一番趣味。那是一種甚麼様的趣味呢？那可以説是由於預先向読者解釈「謀略」的全貌而産生的幽默和趣味性。而且其中充満着作者的「滑稽」。這種「滑稽」則是作者所重視的。為了使那様「滑稽」吸引人，作者才有意採用了沿着時間車軸展開故事的這様叙述方式。

キーワード：西遊記，叙述法，滑稽